

(6) 卷七「船上臨幸事」を境に「先帝」から「主上」へと呼称

刊本『笈の小文』須磨の条における「蛸壺や」の句解について

露 口 香代子

貞享四年十月、芭蕉は江戸を発ち、鳴海・名古屋に立寄り、故郷伊賀で越年した後杜国と共に吉野・奈良を訪ねて大坂へ入り、さらに須磨・明石の地を巡遊した。この行脚の成果が、いわゆる『笈の小文』の紀行であることは言うまでもない。だが、現在、『笈の小文』の芭蕉自筆稿本は伝わっておらず、この紀行文が『笈の小文』として世に知られるようになったのは、芭蕉の門人乙州が宝永六年に刊行した刊本『笈の小文』によってであった。「笈の小文」の名称について、その刊本『笈の小文』砂石子の序文に、

此翁（芭蕉）上かた行脚せられし時、道すからの小記を集てこれなつて笈のこふミといふ、積て漸洪輪となる。昼夜に是を翫て花に戯てハ哥仙の色をまし、月にうつしてハ四十四百韻の色をます。爾来門葉多しといへとも、唯乙州にのみ披見せし

む。乙州群第と共にせざることをなけき、今般、梓にちりはめて……

とあるように、芭蕉自身「笈のこふミ」と呼んでいたものは存在し
たらしい。しかし、それは土芳『三冊子』（黒さうし）の、

師のいはく、わが句ども多くの集に書誤り多し。是をみづから書本とし、門人の志を以て二三句ほどづゝ書添て、所々の哥仙一折宛、是もいがの門人を初として、志を以て書留むべし。号を「笈の小文」とせん。又「小文」と斗やすべき。

（集英社『古典俳文学大系』より）

とある記述によって知られているように、芭蕉が意図した「笈のこふミ」は、乙州が刊行した『笈の小文』の紀行とは異なるもののようにである。この様に一般に『笈の小文』と呼ばれている紀行文の名

称は、乙州によって付けられたものらしい。しかし、刊本『笈の小文』は、乙州にのみ「披見」を許したという芭蕉の遺稿を伝えている事実には変わりない。というのも、刊本『笈の小文』には「更科紀行」が付載されているが、それは現存する芭蕉自筆稿本の「更科紀行」にほぼ忠実な写しがなされているといわれ、^{*1}それ故、同じく刊本『笈の小文』も芭蕉自筆の稿本に沿って筆写されたのだらうと一般に推測されている。従ってここでは、乙州の写しによって伝えられた事を意識して、『笈の小文』紀行を「刊本『笈の小文』」もしくは「刊本」と呼ぶことにする。

先学の研究によれば、刊本『笈の小文』はもともと未完成の状態であった芭蕉自筆稿本が、乙州の手によって写されたものという。今、刊本の本文を便宜上、内容に従って区切り、小題を与えると、「百骸九竅の中に物有……」で始まる冒頭の風雅論、以下、旅立ちの文、道の記論、鳴海・保美の里・伊良古崎・尾張・旧里伊賀上野の各句文、初春の句、新大仏寺参詣記、伊勢の句、吉野旅立ちの文、長谷寺・葛城山の句、峠・瀧の句、吉野の句文、紀伊路の句、旅の賦、大和路の句、須磨の句文となる。各条、内容的にほとんど関連がみられず、むしろ独立した記述の寄せ集めの観がある。事実これを裏付けるものとして保美の里・伊良古崎の句文や旅の賦の箇所¹に相当する芭蕉真蹟懷紙等が発見報告されている。厳密にいうと刊本のもととなっている芭蕉自筆のものは、本来「稿本」と称されるべき形で乙州の手にあったかどうかかわからない。或は、何枚かの芭蕉真蹟懷紙を乙州が編集し、それが刊本の原形となったのかも知

れない。この刊本成立の問題は、従来、芭蕉の稿本があったとする芭蕉未定稿説^{*2}と、芭蕉真蹟懷紙を乙州が編集したとみる乙州編集説^{*3}とに分かれて論じられてきたが、未だ結論が出されていないように思う。敢えてここに私の考えを加えると、刊本の本文はほぼ忠実な写し¹が為されているとしても、猶、芭蕉の自筆でない限り誤写や、書写した者の意図的な加筆等を一応は疑ってみる必要があると思う。

さて、以下問題にしようとする須磨の条は、刊本の他の箇所比べて推敲の跡が窺われ、殊に独立性の強い一条といわれている。この須磨の条の中で、明石の箇所といわれるのが、

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

とある、前書をもつ発句である。「蛸壺や」の句は元禄四年刊『猿蓑』にも、右と同じ前書と共に入れられている。この句の解釈の中心は「はかなき夢」にあると思われるが、たとえば頼原退蔵著『芭蕉俳句新講』（昭和九一―二十二年）に、

明石に宿って浜辺あたりの蛸壺を見たのであろう。そこでふと感慨を發したのである。この蛸壺の中に眠る蛸は明日までの命とも知らず、はかなき夢を夏の月に結ぶであろうといふのである。「はかなき夢を」といふのに短夜の旅泊の情もおのづから籠っている。

とある解釈が一般的だろう。「はかなき夢」という語には「夏の夜の明けやすいはかなきと、蛸壺のはかなきと、短夜の旅泊のはかな

さ」が込められているという（岩田九郎編『諸注釈芭蕉俳句大成』明治書院昭和四十二年刊）。須磨の条のこの句が『猿蓑』と同じ形で載るために、須磨の条の句解は一般に右のような独立した発句として解釈されていることが多い。この句が『猿蓑』の発句であるなら、右の解釈で問題はないと思う。しかし、須磨の条においては、「蝟壺や」の句の前後に句文があり、この前後の句文の流れを無視して、『猿蓑』と同じような発句として解釈をしてもよいのだろうかという疑問が湧く。やはり、須磨の条は、少なくとも一纏まりの関連性を以て並べられた句文とみるべきではないだろうか。

「蝟壺や」の句の古注釈の一つに、あまり顧みられてない梅門の『師走囊』（明和元年序）がある。それには、

夏の夜のはかなく明るを蝟壺に入れて人に取らるゝかことしはかなしと也。題にある（かか）しの夜泊とあれば、むかし平家一門此所に暫やとりて滅亡せしを蝟の壺に入てはかなき夢を見ることく也との心も有へし。

とあるが、平家一門云々と持ち出すのは『猿蓑』の発句の解釈として明らかに深読みになる。なぜなら「明石夜泊」にも「蝟壺や」の句にも平家一門を想起させるものは一語もみられないからだ。この梅門の解釈について、さきの『芭蕉俳句新講』では「平家の滅亡にまで説及んだのは例の鑿説である」とされ、志田義秀著『芭蕉俳句の解釋と鑑賞』後編（至文堂昭和二十一年刊）でも、「この句は人生観が寓せられてはゐるがそれは幽かに寓せられてゐるといふだけで、表面的には蝟に対する哀憐の情、同情の念であり、それと共に

明石海岸の夏夜の月光美の描写である」（同上）のであって、「はかなし」に、世の栄枯盛衰や無常観が入る解釈は「従ひ難いもの」とされる。然しながら、私は『師走囊』の解を単に穿ち過ぎとして切捨てるに躊躇したい。梅門は『猿蓑』の発句を、刊本の須磨の条を知った上で解釈したものと恐れ、「蝟壺や」の句以降に、平家一門云々と記される文の内容を考慮したのだろう。『師走囊』と同じような解釈をするのが、空然著の『猿みのさかし』（文政十二年刊）である。この句の解釈には、

あかしのはかなきハ杜国がけしの花の注に説たる如く……とあり、その杜国の句とは、同じく『猿蓑』に亡人杜国の作として載る「似合しきけしの一重や須磨の里」である。そして、その句解には、

平家須磨の内裏等思ひ出られて、すまの古戦場の懐旧也。似合しきとけしの一重とハ此あたりのその昔のはかなきさま、今けしの盛に咲たる有為転変の世の中を觀想したる句也。

とある。「蝟壺や」の句が刊本中の発句であるなら、私は、前後の文の関係から平家一門云々を含めて解釈することは、むしろ相応しいと思う。

「蝟壺や」の句には、昭和四十九年の『芭蕉・蕪村展』（逸翁美術館）に次のような文を付した「蝟壺や」の真蹟懷紙が掲載されている。

須磨の浦伝ひしてあかしに泊る 其比卯月の中半にや侍らん
たこつばやはかなき夢を夏の月

はせを
解説は成立時に触れていないが、この真蹟懷紙を紹介している『諸

本対照芭蕉俳文句文集」（清水弘文堂昭和五十年刊、以下「諸本対照」）によれば、刊本「爰の小文」執筆時期の成立で、元禄三四年頃という。また阿部正美著『新修芭蕉伝記考説 作品篇』（明治書院昭和五十九年刊）では筆跡から貞享後期、即ち須磨明石歴遊よりやや後とされているが、いずれにしろ、須磨の遊歴中のものでないという見解は一致している。そして、この懐紙と隔たらない時期に、後にみる「夏はあれど」の真蹟懐紙が記されているが、この懐紙にも「卯月の中比、須磨の浦一見す」の一文がある。これらの「須磨浦伝ひ」の短文は、刊本の須磨の条との成立関係はわからないが、前書程度のものであれ、須磨の条が念頭に置かれていることに間違いない。このようにみると須磨の条における「蛸壺や」の句は、やはり『猿蓑』の一句としてでなく、須磨の条との関係から再認識される必要があるように思う。

ところで、須磨の条における「蛸壺や」の句解にあたり、当然ながら、解釈は須磨の条からみたこの句の主題性は何かという点に採られる。尤も、このような観点から句解を試みようとするのは、刊本執筆期の芭蕉の興味が『猿蓑』に載る「幻住庵記」の数度の推敲に示されるように、俳文を如何に主題性をもって記すかということろにあったと思われるからである。

元禄三年七月八月頃の、去来宛芭蕉書簡は、「幻住庵記」の推敲経緯を知るための重要な資料である。書簡の内容は、芭蕉が斧削を乞う意味で去来に草稿（米沢家威真蹟「幻住庵記」）を送ったその返書に関する芭蕉の感想である。去来の芭蕉宛書簡は現存しないが、芭蕉

の書簡の内容によって去来の意見は大体知ることができるといえる。よく知り尽くされている「五十年や、ちかき身は……」で初まる奥羽行脚を述べた冒頭に對し、去来は「発端行脚の事を云て、幻住庵のうとき由」を難じた。即ち「庵記」の主題「栖」からはずれるので発端の奥羽行脚の文は省いた方がよいという。芭蕉としては「長明方丈記の記を読むに、方丈の事はむとて新都の躁動火事地震の乱皆是栖の上をいはむとなり」、つまり、『方丈記』の冒頭に倣おうとしたらしく、主題性から外れるという意識はなかったと弁明している。結局去来の意見をいれたことは『猿蓑』の「幻住庵記」を見ての通りである。

また、元禄三年九月十三日付加生宛芭蕉書簡も同じ意味で出されてよい資料だろう。これには、凡兆の「憎鳥文」（現存せず）について、

文の落付所何を底意に書たると申事無御さ候而ハおどり・くどき・早物語のたぐひニ御さ候。古人の文章に御心可被付候。

という評が述べられている。なお、この凡兆の「憎鳥文」を元に芭蕉が書き直した「鳥之賦」が松琵琶編『雪の流』（寛保三年刊）等に見える事は周知の通りである。それはともあれ、ここでいう「底意」とは主題性の概念に入ると考えられ、その主題性のない文は、おどりとやくどきといった言葉の羅列に過ぎないという。文を綴るにあたって大切なことは、「底意」を以て書かれることである。

以上の事を思い合わせると、刊本執筆期において芭蕉が一貫して追求していたものは、「底意」のある文、即ち、如何に主題性をもつ

関する芭蕉の感想である。去來の芭蕉宛書簡は現存しないが、芭蕉

た文を書くかという点に集約されるのではないだろうか。須磨の条には謡曲『敦盛』や『松風』、『源氏物語』の須磨の巻、『平家物語』等の主題があり、また、謡曲の修羅物のフィナーレに類似するともいわれてきた。しかし、これらの主題が「底意」となるとは限らない。ここで使う主題性とは、主題によって創り出される情感を、仮に「主情」と呼ぶことにすると、主題が単に題材の引用に終るのでなく、その主情も伴っている時に主題性があると考えておく。たとえば、謡曲『敦盛』の主題が採られていても主情が語られていなければ、おそらく芭蕉のいう「底意」といえないだろう。その主情こそ、芭蕉がもっとも苦心して求めていたものと思われる。須磨の条において「蛸壺や」の句を解するには当然、須磨の条の全体を統一する情感——主情を明らかにした上でなければならぬと言えぬ。またこの句に限らず、その主情は、未定稿段階であるが、芭蕉によって撰ばれているとみられる各句と、須磨の文との関係においても成り立つものでなければならぬ。そこで、先学によって様々に分析されてきた須磨の条を今一度とりあげ、主情を明確にしてみようと思う。

須磨の条は次のような構成になっている。

- 1 須磨
- 2 月はあれど留守のやう也須磨の夏
- 3 月見ても物たらははず須磨の夏
- 4 卯月中比の空も朧に残りて、はかなきみじか夜の月もいと

以上の事を思い合わせると、刊本執筆期において芭蕉が一貫して追求していたものは、「底意」のある文、即ち、如何に主題性をもつ

と艶なるに……

5 海士の顔先見らるゝやけしの花

6 東須磨・西須磨・浜須磨と三所にわかれて、あながちに何わざするともみえず……

7 須磨のあまの矢先に鳴か郭公

8 ほととぎす消行方や嶋一つ

9 須磨寺やふかぬ笛きく木下やみ

10 明石夜泊

11 蛸壺やはかなき夢を夏の月

12 かゝる所の穠なりけりとかや。此浦の實は秋をむねとするなるべし。……

また、同じ貞享五年の須磨旅行の成果として『猿蓑』に載る、

13 かたつぶり角ふりわけよ須磨明石

14 似合しきけしの一重や須磨の里

も挙げておこう。最も14は杜国の作となっているが、芭蕉代作説もある。

貞享五年四月二十三日、須磨から京都に入った芭蕉・杜国は、奈良で別れた惣七(猿雖)に宛てて、四月廿五日付で連名の書簡(以下惣七宛)を出した。惣七宛は、刊本『笈の小文』研究に欠かせない資料の一つで、刊本後半(奈良から大坂、須磨・明石の条)の初案を知る重要な手掛りとなる。須磨の条の文は、所々この惣七宛がもととなっていると思われる箇所があるが、須磨の句は惣七宛に載らず、おそらく須磨の条の句と文は同時に作られたものではないだ

らうと従来の研究でいわれている。また、須磨の各句も成立時期が異なっているものもあるようだ。このことは須磨の句が、宝永六年の『笈の小文』刊行までの以下の各書に別々に散見される点からも推測される。

元禄四年刊

去来編『猿蓑』に11・13・14の句

元禄九年刊

史邦編『芭蕉庵小文庫』に8・3の句

元禄十年刊

桃隣編『陸奥衛』に13・11の句

元禄十一年刊

浪化編『続有機海』に9の句

元禄十一年刊

風国編『泊船集』に7・13・11・8・3の句

元禄十一年刊

朱拙編『おくれ馳』に13の句

元禄十五年刊

千山撰『花の雲』に3・8の句

元禄十五年成

土芳著『三冊子』に13の句

元禄十六年序

蕪洲・盾山編『四山集』に11の句

宝永二年刊

其角遺稿『類柑子』に11・13の句

この他、天理図書館蔵大蟲編『芭蕉翁真蹟拾遺』（天保期成、以下『真蹟拾遺』）にも小築菴春湖蔵として吉野の句と共に3・8・5の句が見られる。こうして並べてみると、11と13、3と8の句の組合わせがあるが、11と13、3と8は、ほぼ同時に作られた関係にある二組ではないだろうか。一方、須磨の条の構成を文の流れて辿ると、旅立ちの形をとる4で始まり、徐々に盛り上がりを見せて12の最後は詠嘆で終る、所謂『古文真宝集後集』の「甲古戰場文」^{*5}の類型である。そしてその文の節目節目に、芭蕉自身か、あるいは乙州の手によって各句が置かれた。以下、順次各句文の主題性を検討する。

2・3の類句については、2の異形句「夏はあれど留守のやう也 須磨の月」の真蹟詠草が現存する。2の句と真蹟詠草成立の関係は、『諸本対照』では真蹟詠草が『笈の小文』の執筆段階で書かれたのか、貞享五年の道中書きであるのか、あるいは後にその道中書きの文辞を整えて書いたものか判然としないところ。今は岩波文庫『芭蕉俳句集』（中村俊定校注）に従って、下五で「須磨の夏」が強調されている「月はあれど」の句の方を推敲された形とみておく。これらの句の主題は夏の須磨であるが、では、須磨の夏の主題性は何なのだろうか。「夏はあれど」真蹟詠草との比較によって主題性を考えてみよう。

「夏はあれど」真蹟詠草前文

卯月中比須磨の浦一見す、

うしろの山は青ばにうるハしく

月はいまだおぼろにて、はるの名残もあはれながら、

たゞ此浦のまことは秋をむねと
するにや、

心にもものゝたらぬけしきあれば

須磨の条の文

卯月中比の空も臚に残りて、

はかなきみじか夜の月も、いと

ど艶なるに、山はわか葉にくろ

みかゝりて……海人の軒ちか

き芥子の花の、たえ〜に見渡

さる。……（〜4）

かゝる所の種なりけりとかや、

此浦の実は秋をむねとするなる

べし……（〜12）

秋なりせば、いさゝか心のはし

をもいひ出べき物をと思ふぞ

（〜12）

須磨・明石は歌枕としてよく知られた地で、歌の世界では須磨の地といえ、まず、松風村雨の海女の伝承を想い浮かべてよいだろう。この伝承は、近世において西行作『撰集抄』や謡曲『松風』で広く知られていた。右の比較から、2・3の句にも12の文に見える謡曲『松風』の詞章「かゝる所の種なりけりとかや」が掛けられていることがわかる。

須磨の蟹の塩焼衣をさを粗みま遠にあれや君が来まさまぬ

『古今集』卷十五 恋歌五 読み人知らず

わくらばにとふ人あらは須磨の浦に藻塩たれつゝ侘ぶと答へよ

『古今集』卷十八 雑歌下 在原行平

など、いずれも里村昌琢編『類字名所和歌集』（元和三年刊）にも採られる代表的な歌で、須磨の海人には恋や不遇に沈む身の嘆きが結び付けられて詠まれ、さらに、『源氏物語』の明石の上と光源氏の恋の舞台として古歌を交えて詠まれてきた。

恋をのみ須磨の浦人藻塩垂れはしあへぬ袖の果てをしらばや

『新古今集』卷十一 恋歌二 摂政太政大臣

右のように、伝統的な須磨は、12の「此浦のまことは秋をむねとす」とある如く、秋の須磨であって、それに「月」「千鳥」「浦伝ふ」等の語を詠み込んだ歌が多い。伝統的な和歌の主題と俳諧の主題を芭蕉はどのように扱おうとしているのだろうか。これについて去來の『旅寝論』は、

和哥の見る所と俳諧にらむ所と、趣たがひ有のみ也。縦は花は和哥の題、菜種は俳諧の題と云ふはよし。花は俳諧の題にあ

らずと云ふは非なり。吉野は和哥の名所、如意は俳諧の名所と云ふはよし。芳野はいかいかの名所にあらずと云ふは非也。

つまり、俳諧が和歌の題に入りこめないことはなく、

此故に花やよしの野を詠ぜんと、すこしも和哥の領を俳諧よりを（押）して作するにあらず。花・よしのにも又はいかいかの領有。古人其景情の和哥にもれてやむまじき所有を以て、俳諧は行れたり。

それ故に、同題において和歌では扱ふことのできない所が俳諧で行なわれるという。このことは白石佛三氏が簡潔に説明しておられるので、次に引用してみたい。

詩歌連俳の世界で、季題と名所は、その發生・機能・意義を等しくする二つの発想軸であった。前者が時間軸、後者が空間軸である。そしてその双方に、詩歌連俳に共通する伝統的な通時題と、新興俗文芸のみに通用する近世的な共時題とがあった。前者を縦の題、後者を横の題と蕉門では呼ぶ。

〔もう一つの「細道」——芭蕉と歌枕についての試論〕
『文学』昭和五十年十二月号

右の言葉を借りて言うと、須磨は空間軸における伝統的な縦の題で夏は横の題といえよう。そして横の題について、本来俳諧には、野々口立圃の『宝蔵』（寛文十一年刊）の序に「やうじ・耳かきやうの物といへど、身に随ひ心を慰さましむる時は則宝也」という如く、日常卑近の見慣れた物でも、見様によっては「宝」に匹敵する——同じ物を普段とは違ふ斜め方向から眺めて新しさを見出すという発

想がある。須磨の条2・4に当てはめていえば、伝統的に秋の須磨であるところを夏の須磨にし、その俳諧的発想の上に伝統的本情を見出そうとしているように思う。それにはただ季を夏としたところ、主情が表わされるとは言えない。

去来曰く俳諧は新ら敷趣を専らとすといへども、物の本性をたがふべからず。
 (『去来抄』修行篇)

たとえ和歌で扱われない夏の須磨を題としても、「物の本性」つまり寂しさ、悲しさ、あはれといった須磨浦の伝統的な本情を失ってはならないのである。このように2・3の句をみる時、夏の須磨にも「留守のやう也」(2)「物たらはすや」(3)で表わされている寂しさが、これらの句の主情となっていることに気づく。

5の句には、先にあげた『真蹟拾遺』、及び嵐蘭編の『けし合』(元禄五年自序)に「海士の旧跡」の前書がある。句形は5に同じである。西鶴の『一目玉銚』(元禄二年刊)によると、須磨寺近辺に松風村雨の石塔があると記され、「海士の旧跡」はこれをさすともみてよい。惣七宛に「行平の松風村雨の旧跡」と記される事からも確かめられる。5の句の位置から、これには4の文が対応されていると思われる。「海士の旧跡」に相当する箇所を4の文中で見ると、「上野とおぼしきところ」と須磨の山手辺としかわからない。4の文・5の句では作意的に松風村雨の旧跡はぼかされた。そして、後に12の文の前半で「後の方に山を隔て、田井の畑といふ所、松風村雨ふるさといへり」と須磨浦の眺望の箇所が触れている。未定稿段階の須磨の条である以上、全体構成云々をいうのは危険である

が、松風村雨を12に下げたのは、それなりの意図があったと思われる。「海士の旧跡」の前書があれば、明らかに海士は松風村雨の倅を意識させる句であった。しかしここでは5の句は、4の文「ほととぎす鳴出づべきしのゝめも海のかたよりしらみそめたるに、上野とおぼしき所は、麦の穂浪あからみあひて、海人の軒ちかき芥子の花の、たえ／＼に見渡さる」という夏の早朝の須磨の景情で解されるべきであって、海人に松風村雨を見ようとするのは、深読みといえよう。では、なぜ松風村雨を登場させなかったのか。4・5は須磨の条の中で、夏の須磨の主題を最も深く印象付ける箇所となっている。4・5を併せて読むと、14の句もあることからわかる様に夏の須磨は、海人よりむしろ白くはかない芥子の花で象徴されているのである。それだけに、この箇所に松風村雨の悲哀をもってくるには重すぎると考えられたのではないだろうか。「海士の旧跡」を略した理由があるとすると、それは夏の主情を重視したためだと思う。

6の文を挿む形になるが、5の句の「海士」と7の句の「あま」には連関性をみたい。7の句は、6の文の前半「きすごといふうを」網して、真砂の上にはしちらしけるを、からすの飛来りてつかみ去る、是をにくみて、弓をもてをどすぞ、海士のわざとも見えず、若古戰場の名残をとどめてかゝる事をなすにやといとど罪ふかく」を受ける。この度の「あま」は5の場合より具体的な姿で捉えられているように思う。和歌の伝統における須磨浦の塩焼く海人を、殺生を生業とする海人として捉え、その弓をもって鳥を威す現実の海人の姿に、恰も往古から続く宿業を見る如く、戦場ではかなく亡く

なつていった無名の兵士の姿を重ねる。そして「矢」といえば惣七宛にある「本間が遠矢を射て名をほこりたる跡をきつて」の矢がこの句に詠まれたのだろうか。それならば、植田下省子編『兵庫名所記』（宝永七年刊）に「建武中、尊氏つくしより上落のとき本間情四郎重氏此和田の渚より將軍の御船へ遠矢を射て名をあげし所也」とあるように新田方の本間孫四郎重氏の放った矢が、和田ノ御崎から六町余り越えて尊氏方の船にとどいたという『太平記』卷十六に載る逸話である。また、「古戰場」の語から一の谷の合戦を彷彿させるものがある。7の句の「郭公」の一声に、殺生を生業とする海人の宿命のやるせなさが象徴されているようだ。ここにこの句の主情が込められているように思う。

8の句は、『真蹟拾遺』に「あかし」と前書が付されており、11の句のみが明石の句として詠まれたのでないことを示す。言う迄もなく「嶋」は淡路島で、この句は6の文の「てつかひが峯にのぼらんとする」よりも、むしろ4の「ほととぎす鳴出づべきしのゝめも海のかたよりしらみそめたるに」及び12の冒頭「淡路島、手にとるやうに見えて、すまゝあかしの海、右左にわかる」に对照される。この句は眺望の景を詠んだだけの句だが、

ひとこゑはさやかに鳴きてほととぎす

雲ちほるかにとほざかるなり

（『千載集』卷三 前右京権大夫頼政）
ほととぎす鳴きつる方をながむれば

ただ有明の月ぞのこれる

（『百人一首』後徳大寺左大臣）
等の歌が下敷きになっているとみられる。この句の「ほととぎす」の一声は、7の句の「矢先に鳴くか」のような鋭い一声ではなく、夏の早朝、一声が余韻を残しながら次第に遠ざかっていくという、空虚感があるように思う。そして、この空虚感は、右の引用歌の本情でもある。主題性の点からいえば、ほととぎすの一声で表わされるこの空虚感も、また夏の須磨に主情を添えるものではないだろうか。

9の句は、謡曲『敦盛』そのものの世界へ連れ込まれるような感動的な句である。この句の成立は、初案形（上五が「須磨寺に」）を載せる浪化編『続有磯海』（元禄十一年刊）の注に水草が所持していたとあるので、早くとも水草と芭蕉が出会った元禄二年頃になるだろうと推測されている。什物に敦盛の御影、青葉の笛を蔵する（『一目玉鉢』須磨寺や、須磨寺から一五キロ程離れた敦盛の石塔を廻った時の印象だろう。石塔は敦盛の霊が再来した場所という。現在、山陽電鉄須磨浦公園駅から国道2号線沿いに少し西へ歩いたところにある。ところで、惣七宛から、芭蕉らは須磨寺宝物の高い拝観料に気分を害し、結局見ずに立ち去ったらしい事実が想像されているが、この事実を重視し、中七の「吹かぬ笛聞く」に、理屈を付けた皮肉とだとする解釈がある。しかし、須磨寺訪問直後の句ならまだしも、一年程の時の隔たりがあつて、猶、感情的に芭蕉がこの様な句を詠んだとは考え難い。また、惣七宛に見えていた「敦盛の石塔」「生年十六歳にして戦場に望熊谷に組ていかめしき名を残

し待る」という敦盛に関する記事が須磨の条で省かれたのも不審だ。だからといって、この句は乙州の手によって入れられたもので、元来須磨の条に入り得ないものとして直ちに切り離すことには不安がある。乙州が句撰にまで関与していないとみたいからである。惣七宛にあった敦盛の名が須磨の条で省かれている事実については、從來杜国の死と須磨の条の成立問題を関連させて扱われてきた。須磨の条と杜国との係りは、先学によると、須磨の条の成立が杜国の没後、即ち元禄三年三月二十日以後であったとすると、芭蕉は須磨の条の執筆段階において、謡曲『敦盛』の佛に杜国を意識していただろうという。そして、その杜国の死が、須磨の条の中断理由になつたとされる。しかし、杜国の死以前に須磨の条が成立していたとしても、惣七宛が芭蕉と杜国の連名であること、また惣七宛をだした前日の、四月廿四日付惣七宛杜国書簡においても杜国は「あつものつかニまいりてハ、をのこたへられず泣申候」と須磨での感動を語っていること等によって、須磨の条執筆の初めから杜国は深く係っていたように思う。さきのように杜国の死が須磨の条の執筆期に重なるのが事実としても、果たしてどれ程杜国の死が9の句の主題性に影響を与えるのか疑問に思う。確かに、綱島三千代氏が『笈の小文』成立問題再考（『俳文藝』第十四号）で述べておられる如く、9の句は芭蕉の意識の中で、杜国の死の前後において敦盛の佛から杜国の佛へと「変転」したのかも知れない。しかし既に述べた通り、杜国の死は意識されたとしても須磨の条における9の句の主旨、即ち謡曲『敦盛』に語られる「あはれ」は、芭蕉の杜国に

対する「あはれ」ではないはずだと思われる。芭蕉が杜国の死を全く意識しなかったと言つてもいいが、9の句は12の最後の部分「其代のみだれ、其時のさはぎ、さながら心にかび佛につどひて」以下の幻想へと展開する導入句だと思ふ。須磨の条で略されたという敦盛は、須磨寺の木下闇から幻想的に聞こえてくる青葉の笛の音だけで存在は充分である。しかも6の文で鉄拐山の案内を頼んだ子供に「十六と云ひけん里の童子よりは、四つばかりをとく／＼なる」と、義経を鴨越に案内した熊王を想起させるなど、9の句の前後の文が、この句に関連する主題をとっている点も喚起されるべきであろう。

そこで、冒頭に問題を提起した11の「蝸壺や」の句についてだが、意味はさて置き、まず、この句の主旨は形容詞「はかなし」にあるとみて間違いないだろう。少々意外に思うのは、「はかなし」は芭蕉自身、作品で使用している例があまりない。広田二郎著『芭蕉と古典——元禄時代』（明治書院昭和六十二年刊）によると、「はかなし」の使用例はこの句及び評語や判詞の類を除くと、4の「はかなきみじか夜」と、『細道』の市振の条の「はかなき言伝」と、元禄二年夏に記された「天有法印追悼」真蹟懐紙の「いづの国八重の沙風に身をたゞよひて 波の露はかなきたよりをなむ告待るとかや」にあるのみという。「はかなし」の一例目の意味はあっけない東の間の短さで、二例目はちょっとした、さして重要でないという意味だが、11の句の「はかなし」は、二例目の意では当てはまらず、また一例目の意味だけでは物足りない。三例目は表面は人の亡くなっ

たという意味であるが、「露」に掛るとあつてなくむなしという意に、「たより」に掛ると二例目に同意になる。どちらかと言へば、11の句は三例目のように複合的な意味を有すると思われる。「夏の月」があつてなく束の間であるのは、「手をうては木魂に明る夏の月」(元禄四年『嵯峨日記』)とある如く、夏は夜が短く、十五夜を過ぎた月は上ぼつたかと思うとすぐ夜明けになることを指す。「はかなし」は、一つに、このような「夏の月」の短さをいい、4の文の「はかなきみじか夜の月」に対応する語とみられるが、ただ単に「夏の月」に掛る語とは違い、11の場合、さらに意識的に使用されているように思われる。広田二郎氏によれば、「はかなし」は古典作品の中でも殊に『源氏物語』に目立って使われているという。

「はかなし」はいわば『源氏物語』語ともいえる語で、この語を意識的に使うことにより、王朝の雰囲気を出す効果があったとみられる。12の文の冒頭「かゝる所の種なりけりとかや此浦の実は秋をむねとするなるべし」は11の句に呼応し、また13の句の『猿蓑』に載る前書に「此境はひわたるほどいへるもこの事にや」とあるので、11・13両句共に『源氏物語』須磨の巻が下敷きになっているのは確かだろう。この点のみからみると「はかなき夢」の主情は、専ら『源氏物語』の光源氏と明石の上の恋を彷彿させる王朝世界の優美な情感にあることになる。しかし、このような『源氏物語』的本情は、今までみてきた「芥子の花」(5)や「あま」(7)等に象徴される夏の須磨の情感とはやや傾向が違っているように思う。すなわち「芥子の花」や「あま」には、むなしさや、やるせなさといった

哀調が底流にあり、優美な情感とは隔たりが感じられる。それ故に11の句についても、本来須磨の条に入り得ないとする見解もある^{*8}。刊本の句撰は乙州の手によるのではなく芭蕉であったとする立場においては、11の句が入れられたそれなりの理由があると思われる。従って11の句の「はかなし」は、『源氏物語』による解釈のみでは未だ尽くされていない情感があるように思う。果たして芭蕉は「はかなし」に和歌の本情そのものを求めるだけに留まっていたのだろうか。

ところで、惣七宛で旅の感慨が最も深く述べられている箇所「其日の哀其時のかなしさ、生死事大無常迅速君わするゝ事なかれ」は須磨の条でどう生かされているのだろうか。例えば『方丈記』を繕けば、

すべて世の中のありにくく、我か身と栖とのほかなく、あだなるさま、又かくのごとし

という、世の中や人生があつてなく、無常でむなししい意の「はかなし」がある。もし11の句の「はかなし」が『方丈記』に通じる意を含むならば、惣七宛の「無常迅速」の感動は、この「はかなし」にあたるのではないだろうか。「無常迅速」の語は、孤雲懷辨筆記の『正法眼藏随聞記』巻二の八「示云、無常迅速也、生死事大也。暫存命ノ間、業ヲ修シ、學ヲ好ニハ、只佛道ヲ行ジ、佛法ヲ學スベキ也」や、巻二の十三「無常迅速ナルヲ忘レテ、徒ラニ世事ニ煩コト莫レ」などに見える禅語で、因みに岩波古典文学大系の注には「すべてのごとが移り変ることきわめてすみやかであること、特にこ

こは命の終ることきわめて早いことをいう」とある。芭蕉は『更科紀行』にも「無常迅速」の語を使っており、この頃から芭蕉はこの語を頻繁に使うようになるという。このような禅語を使うようになったのは、貞享五年に、既に芭蕉が交流を深めていた仏頂和尚の影響もあったのだろう。また、『正法眼蔵随聞記』は、寛文九年・十年の二回にわたり板木が改めて板行され、寛文十一年・延宝三年の各書籍目録にもみられ、一般でも参禅を志す程の者なら手に触れる書であったのかも知れない。つまり、11の「はかなし」は、惣七宛の「無常迅速」に代わる語であり、『方丈記』の「はかなし」の意味も含まれていると思われる。

次に、同じく惣七宛で、平家の女院・女官の逃げ惑う姿を想い浮かべて「あはれなる心地」と述べる、その「あはれ」の語が須磨の条でどのように生かされているのかも見ておこう。伝統的には、旅をすることそのものが「あはれ」*¹⁰であった。例えば近世において『方丈記』と同じ鴨長明の作とされていた『東関紀行』『海道記』でも旅の折々に触れては、「おもしろし」よりむしろ「あはれ」の語を多く使っている。そしてその「あはれ」は、

谷川の霧の底をおとづれ。山風松の梢にしぐれわたりて。日影も見えぬ木の下道。哀れに心細し。 (『東関紀行』不破)
 逆旅にして友なきあはれには。何となく心ぼそく。空に思ひしられて。

露の身をおくべき山のかげやなき
 やすき草葉もあらしふきつゝ (『海道記』鳴海瀧)

の様な、哀愁を帯びた情感を伴う。この「あはれ」に近い情感として、同じく『海道記』や『東関紀行』から、「はかなし」を挙げることができる。

憐むべし。煩惱は家の犬のみにあらず。愛着は濱の蟹にふかき事を。是を見てはかなく思ふ。我々かしこしや否や。生死の家に着する心は。蟹にもまさりてはかなきものか。

(『海道記』鳴海瀧)

彼の満誓沙彌^{*11}が。比叡山にて、此の海を望みつゝ詠めりけん歌思ひ出でられて。漕ぎ行く船の跡しら波。誠にはかなく心細し。

(『東関紀行』勢田の長橋)

笠原の野原を打ち通る程に。老曾の森といふ榴村あり。下草深き朝露の。霜にかはらん行末も。はかなく移る月日なれば。遠からず覚ゆ。

(『東関紀行』)

中御門中納言宗行と聞えし人の。罪ありて東へ下されけるに。……其の家を尋ぬるに。火の為に焼ける。彼の言のほも残らずと申すものあり。今は限りとて残し置きけんかたみさへ。跡なくなりけるこそ。はかなき世の習ひ。いと哀れに悲しけれ。

(『東関紀行』菊川)

引例の「はかなし」は、悲哀・哀愁を帯びた情感も含んでおり、ここでは、「あはれ」の類語になっているように思う。「あはれ」と「はかなし」が同じ概念であると言うのではない。もちろん両者は区別されるべき語だが、「あはれ」と「はかなし」の近似点を取上げることも可能であるように思われる。引例に限ってみれば、「あはれ」

はしみじみとした情感そのものを直接表わすのに対し、「はかなし」は「はかなく移る月日」など時の流れが根底にあり、その結果、あつげなく過ぎ去った過去に対し湧き起こる情感であるように思う。

はかなさをほかにいはずはじ櫻花

咲きては散りぬあはれ世の中

〔新古今集〕卷二春下 後徳大寺左大臣

においても、この世が東の間であることを桜の花以外には、他に何にも例えて言い様はないだろう、咲いては次々に散っていく……：あこの世は何とむなしくはかないことか、と「あはれ」は「はかなし」に重なった意味に解される。以上を考慮するに、須磨の条における11の「はかなし」は、『源氏物語』語でもあるが、それよりもむしろ須磨・明石の旅の句である点に比重が置かれており、『方丈記』『海道記』といった中世的仏教観を背景にした語として多分に意識されているように思う。

それでは、「はかなき夢」の「夢」とはどういう夢なのか。おそらく廬生の夢でもなければ胡蝶の夢でもないだろう。それは、12の文にいう「其代のみだれ、其時のさはぎ、さながら心に」浮かぶ夢であつて、気持ちよく眠りに就いて見た夢ではない。現実には幻を見る「夢」である。その「夢」には、一の谷の合戦の幻想や、松風村雨の幻、あるいは光源氏と明石の上の幻が交錯するのである。句作りにおいて、例えば『統後撰集』の「思ひかね見しやいかにと春の夜のはかなき夢をおどろかすかな」（藤原家長）や『新古今集』の「涙川身も浮きぬべき寝覚かなはかなき夢のなごりばかりに」（寂蓮

法師）などが使われているのかも知れない。しかし、それらは句作りの上に使われただけで、意味まで引かれるものではないと思われ。11の句の「夢」は、藤原家長や寂蓮法師が詠じたような一時的な夢ではない。「往往、鬼哭、天陰、則聞、傷心哉。秦敷漢敷、將近代敷。」（『古文真宝後集』卷五「甲古戰場文」李華）の幻覚の如く、現在から過去へ時を超越した自由な空間の「夢」と捉えたい。11の句の「夢」は、正に、後に『細道』の旅、平泉で作られた「夏草や兵どもが夢の跡」の「夢」に等しく思われる。「夢」といえば元禄四年四月廿八日の『嵯峨日記』の項に、芭蕉が亡くなった杜国の夢をみて涕泣したという記事がある。そして、芭蕉は、「我夢は聖人君子の夢にあらず、終日忘想散乱の気」のある「念夢」だという。もし杜国の没後に11の句が成立したなら、あるいは、11の句の「夢」は、杜国への「念夢」も込められたかも知れない。それはともかく、11の「夢」は、過去と現在の隔たりも一瞬のうちに超越する幻想であつて、その「夢」をあつげなく、むなしと感ずるのが、「はかなき夢」ではないだろうか。

ところが、「はかなき夢」は11の句に付す「明石夜泊（10）」の前書によつて、旅泊の「夢」の意が強調されることになる。10は、従来虚構と指摘されている箇所である。その虚構というのは、惣七宛には明石から須磨へ戻って泊ったと記されているのに、「明石夜泊」となっていることである。そもそも、10のような前書について許六は次のように説いている。

昔も近年も、前書する事、皆其発句の講釈して、前書と云物に

あらず。前書して講釈の上にてきこえる句などハ、よき句にハ
あらず。前書と云ふハ、其句の光を添ふる事也。

『俳諧問答』「自得発明弁」

前書に二様あるべし。一にハ発句の光をかゝぐる前書有。二に
ハ、詞書なくてハ後代難とすべき時、前書を加へて後のいひわ
けに残す事あり。

『宇陀法師』元禄十五年刊

例えば『猿蓑』編集の際、越人の「ちるときの心やすさよ米、蓑花」
の句を「芥子の花」だけでは言い足りないので、芭蕉が「別僧」を
前書に付け加えたのは、発句に光を添えたといえるのである。で
は、10は11の句にどういう光を添えているのだろうか。10を特に意
識した11の句の解釈を挙げてみる。

この句を読んで恰も自分（が）蜻蛉の中にあり、《或は旅寝に
あって》夏の月に対して夢みてゐるやうな幻想的な気持ちにな
り、はかなさと明るさの交錯したあはれな感興に身をゆだねつ
ゝしかもさうしたものが結局この人生であるかのやうな感慨を
も覚える……

（笠井清「芭蕉の虚構について」）

初めに述べたように、確かに『猿蓑』の中の句としては、右のよう
な前書の効果を認めてよいだろう。というのも「明石夜泊」は『三
体詩』（延宝三年刊『新增書籍目録』に「三体詩假名付」）や『唐詩
選』（天和元年刊『書籍目録』に「唐詩絶句」等）に収められる、有
名な「楓橋夜泊」の詩題にひかれた前書で、この前書だけで、既に
旅泊の感懐が創られているものとみられる。

楓橋夜泊 張継

月落烏啼霜滿天

江楓漁火對愁眠

姑蘇城外寒山寺

夜半鐘聲到客船

（南郭先生考訂『李于鱗唐詩選』寛保三年高山梓行による）

「楓橋夜泊」は、謡曲「三井寺」でも「月落ち鳥鳴いて。霜天に満
ちて冷ましく江村の漁火もほのかに半夜の鐘の響は。客の船にや」
のようにとられている。芭蕉が「明石夜泊」の「夜泊」の前書を付
した際、旅泊といえ、先の「楓橋夜泊」や、「燈影半臨水。箏聲
多在船」、『三体詩』巻三の「夜泊淮陰」項斯）などにみるように、
船中の旅泊が念頭にあったと思われる。そして、寛政三年板の『唐
詩選国字解』で服部南郭が記すように、夜泊の「愁眠」は「通宵寝
ねず、眺かと驚いた体」で、夜深にうつうつとする眠りと解される。
実際のところ芭蕉が「楓橋夜泊」をどう解していたかはわからない
が、門人許六の解釈とほとんど隔たらないものと思われる。許六は
『和訓三体詩』（正徳四年自序）で次のような詩意を施している。

鞆トモの夜泊の榻カザ枕マク。室ムロのうき寝の波の床。沙駟シヤヒ衣ヒと夜妻。かさ
ねて寝んと漕カウよせて。上りくたりの舟懸フネカケ。近付チカぶりにかいま見
の。空約ソラ束ツ待マ待マ。門カドのじやらつき。階シノ子の轟トノリき。胸ムネつぶる
ゝ折マからに。田舎渡りのわけ知らず。まかれて人に囁ソソハるゝ。
只獨寝の床寒く。月落かゝる淡路嶋。生田の森の村鳥。秋の霜
夜の明けかねて。海士のあさり火行凌ノボひ。寝覚シメた葉粉ハコくゆら
せて。すこし晴行ハルうき眠り。松の嵐の一の谷。須磨寺につく鐘

の声。波の枕にハ傳ひ来て。舟ハ湊を押し出かける。

このように、楓江を須磨浦に置き換えて詩意を施していることからしても、元來須磨浦を楓江に見立てる解釈があったのではないかと
思う。

それでは、須磨の条の中の11の句において、なぜ10を置く必要があるのだろうか。既に述べた通り、「蛸壺や」の句のみが明石の句でなく、8の句にも「あかし」の前書が記された資料があった。そもそも、芭蕉らの明石への訪問の目的は何であったのだろうか。明石の地は、須磨と共に歌枕として和歌連歌に詠まれてきた。なかでも人磨の、

ほのぼのとあかしの浦の朝霧に

島がくれゆく舟をしぞ思ふ

は有名で、明石には、歌聖人磨を祀った人麻呂社がある。『一目玉鉾』では「社領四十石神主月照院」とある。歌人・連歌師や俳諧師であれば、人麻呂社は、当然興味のある名所の一つだろう。しかし惣七宛をみるに、芭蕉らは人麻呂の社のことには触れておらず、歌聖人麻呂に興味があったとは思われない。まして、明石訪問の目的が明石の浦の「蛸壺」を見るためでもあるまい。芭蕉らは鉄拐山に登り、その後は、おそらく旗振山・鉢伏山の尾根をつたって須磨の浦に出て、そこから明石へ向かったと思われる。従って明石に着くのは、早くとも夕刻になると推測されるが、それにも拘らず明石へ向かったのは、是非明石で見て置こうとしたものがあつたと想像される。1〜14の句を須磨と明石に分けると、須磨を詠んだ句と思わ

れるものは六句、残りの三句は明石を詠んだ句とみられる。旅行当時、明石には充分に足を留められなかったはずだが、三句も明石の句があるのは、余程の印象深さに基づいているものと思う。須磨の条の中心は、先の9の句解でも触れた通り12の後半、平家の女院や女官達の逃げ惑う姿を描く箇所である。この箇所は、惣七宛において、須磨寺宝物「蟬折・こま笛」は見なかったものの「此海見たらんこそ物にはかへられじ」と言い放つ、「此海」の眺望に浮かんだ幻想だろう。「物」即ち敦盛の青葉の笛を見る以上に、「此海」即ち須磨から明石にかけての浦は、芭蕉にとって価値あるものだったと解される。顧みて、須磨の条の一つの見方として、須磨の海人―鉄拐山を案内した童子―敦盛（の笛）―須磨浦・明石で繋る一本の線によって全体の主情を辿ることができるよう思われる。このようにみると、平家一門の悲哀の主情が、11に対する10の効果になっていると見るのはいかにも無理がある。平家の主情を11の句に添えるための前書であるなら、10と前書されたことからして不可解だ。しかも「夜泊」の虚構は、先にみたような客愁をそそる情感こそあるがそれはこれまでの「無常迅速」・「あはれ」の須磨の条の主情とは別のもに思われる。結局、11の句が須磨の条から外れて見られるのも、10の前書の存在のためではないだろうか。須磨の条における11の句に対して、10は不必要な前書に思われる。11の句は、刊本「笈の小文」の刊行以前に「猿蓑」「陸奥衛」「類柑子」「泊船集」及び、句集としてではないが「俳諧問答」に見られる。「陸奥衛」には前書がなく、「類柑子」には前書「明石のとまり」があり、「泊船集」に

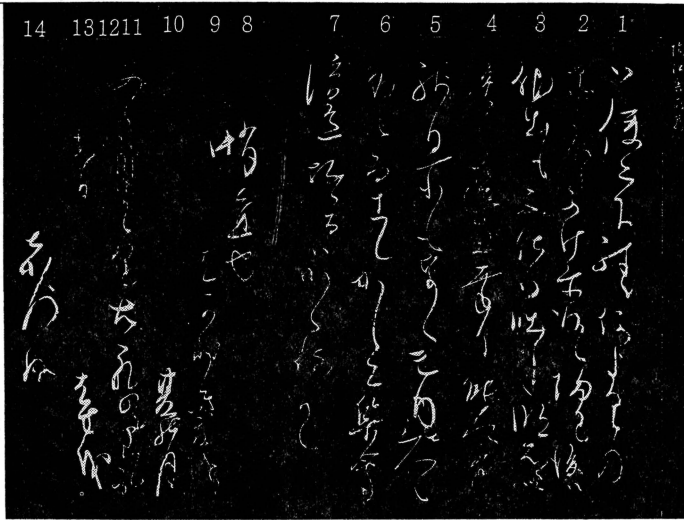
は「あかしの夜泊」の前書がある。各々の前書の意に差はないが、「明石夜泊」とあるのは『猿蓑』の前書のみで、刊本「笈の小文」だけが『猿蓑』と同じ前書である点に却って疑問が生じる。10を前書とした時の11の句の須磨の条からの乖離や、須磨の条の「主情」を考え合わせる時、そこに、刊本における乙州の媒介を考えざるを得ない。11の句を撰んだのは確かに芭蕉自身だったとしても、刊本を刊行するにあたって、乙州は11の句が既に『猿蓑』に載せられている事実は知っていたはずだ。つまりこれは憶測に過ぎないが、乙州は刊本の原稿が未定稿の形であるので、可能な範囲で忠実に芭蕉のものとして伝えようとした。それで、刊本編集の際、芭蕉が『猿蓑』で同句に添えた前書を、須磨の条の11の句に添えたのではないだろうか。ここでもしも芭蕉が前書のある「蛸壺や」の句を須磨の条と『猿蓑』原案とに同時に入れていたとしたら、右の乙州編集説は成り立たない。『猿蓑』の企画は元禄三年六月頃だが、同年八月十三日に「ひざご」が刊行されているので、『猿蓑』の句撰は早くとも元禄三年秋あたりから本格的に始まり、元禄四年五月あたりに原案ができあがったとされる。とすれば、11の句の成立が元禄三年秋以前であるなら、まず須磨の条に11の句が入れられ、その後『猿蓑』撰考期に須磨の条から11の句を撰び、その時初めて前書を「蛸壺や」の句に添えたと考えられる。

ところで、11の句の元禄三年以前の成立を示唆する資料がある。それは、西村真砂子先生が昭和五十三年『俳文藝』第十一、十二号に翻刻紹介された「加賀文庫蔵『俳諧石摺巻物』」所載の芭蕉書簡

である。この「俳諧石摺巻物」は、天保十二年と天保十三年の奥書をもつ巻物で、貞徳・宗因から芭蕉・蕪村までの俳諧有名諸家の短冊・色紙等を模刻墨拓して白字摺りにしたものである。同じ内容のものが天理図書館と大阪樟蔭女子大学及び柿衛文庫にあるが、書名は統一されておらず、一般には「真蹟集覧」(「諸本対照」)「芭蕉俳句集」(など)、天理図書館や大阪樟蔭女子大学では「俳諧名家真跡墨本」、柿衛文庫では「古俳人真蹟集覧」と呼ばれる。諸本の問題は今に触れないことにするが、この真蹟類中に、「蛸壺や」の句が載る随江舎所蔵の芭蕉書簡がある。実は、この書簡は「加賀文庫蔵『俳諧石摺巻物』」の解説にもある通り、芭蕉の書簡としては甚だ疑わしい。第一に問題になるのは「はせせ」の落款である。岡田利兵衛編『図説芭蕉』(昭和四十七年刊、角川書店「芭蕉の本」別冊)に、芭蕉の落款について、

仮名は「はせせ」の「せ」の字の左片が、はじめは下ハラがふくらかであるが、晩年になるにつれて、ふくらみが減り、次第に屈託のない大字となるのである。

とある。この点を注意して見るに元禄三年あたりの芭蕉書簡の「はせせ」の落款は、まだふくらみが残り、「蛸壺や」の書簡にある落款には「せ」のふくらみはない。「蛸壺や」の句は、遅くとも元禄三年頃までには作られていたので、元禄三年以前なら、「せ」のふくらみはさらに顕著なはずである。念のため木村三四吾先生・石川真弘先生にも見て頂いたが、芭蕉の真蹟とするには危険だという御意見であった。しかし、危険であることを承知の上でここに出そう



(大阪樟蔭女子大学図書館蔵『俳諧名家真跡墨本』所載)

とするのは、この書簡に一縷の可能性を認めるからである。すなわち、この書簡が墨拓にされるまでの過程を考えると、まず真蹟と思われるものがあつたとし、それを筆写して板下をつくり、さらに彫師がその字を彫るのである。少なくとも原書簡からは二度、人の手を経て出来上がつてきた字形を、私たちは芭蕉の真蹟かどうか問題にしている。この様な一連の過程を考慮すると、可能性は低いながら全くの偽簡として切捨てるわけにもいかない。以上の事を踏まえ、11の句の資料の一つとして「蛸壺や」の芭蕉書簡を慎重に扱つてみようと思う。書簡の内容は次の通りである。(読めない箇所は□で空けておく)。

- 1 御使被下殊二何よりの
- 2 品々御心□かけ忝存申候。帰り候後ハ
- 3 他出も不仕、御咄申候明石の吟
- 4 鳴〜逗留。幸に能人二逢、
- 5 残る所もなく、其内二三人に
- 6 □候而、十一日かしこ集會、
- 7 濱邊降候而ハ、かく侍り候。
- 8 蛸壺や
- 9 はかなき夢を
- 10 夏の月
- 11 又々御目ニかゝり、右御礼可申上候。
- 12
- 13 十六日

はせを
以上

さて、先にこの書簡の筆跡が芭蕉のものとしては疑わしい点を述べたが、内容の問題点も取上げておきたい。それは、4行目の「嶋く返留」、6行目の「十一日かしこ集會」、7行目の「濱邊」、14行目「嘉衛門」なる人物などが、年譜からみても明確でない点である。須磨・明石の地へ返留したのは、惣七宛によると貞享五年の四月二十日須磨に一時泊したのみで二十一日は布引の瀧に登り、山崎街道を京都に向かっていく。また、須磨・明石には淡路島以外「嶋くく」という程の島はない。字形からは、「嶋」以外に読み様がなないのだが、「嶋」とは何をさすのだろうか。その後の芭蕉は五月中旬頃京都を發って大津へ。大津では六月五日に奇香亭で「鬻子顔ひなごがほの」十吟歌仙を巻き、翌日大津を發って美濃を経て岐阜に至る。岐阜では三侯に寸木を訪ねたり、十五人が座して「蓮池の」五十韻を興行するなど、この六月の岐阜滞在では、多くの人々に会っているようだ。七月三日には尾張へ移っており、同七日には鳴海へ向かい、翌日知足亭で「よき家や」表六句、十日見玉重辰亭で「初秋は」七吟歌仙を巻いている。十四日には名古屋へ戻り、八月の十一日更科へ出立するまで主に名古屋に在った。「嶋」を明石や須磨と限らないとすると、例えば岐阜ではどうか。「嶋」を『日本国語大辞典』で引くと、水流に臨んでいるような所であれば川でも「嶋」という場合があるようだ。そこで『類船集』で付合語をみると、「鶺鴒」の語の付合として「嶋・洲崎・大井川・桂川」等の語があった。(また「鳴海」の語にも「鶺鴒」が付く)。とすると、思い付くのが「おもし

るうてやがて悲しき鶺鴒舟哉」の載る「鶺鴒舟」の真蹟懷紙である。その冒頭は「ぎふの庄ながら川のかかひと」とあり、「嶋くく」は中洲をさすのではないかという憶測もできる。では、十一日に集會即ち句會があったというのはどうか。近いものでは七月十日の重辰亭の七吟歌仙などが考えられるが十一日の日付ではない。そして、「濱邊」云々とあるから、明石・須磨の後であれば、鳴海浦しか考えられないが、話題になっていた明石の吟が、鳴海で詠まれたというのだろうか。それにしても『校本芭蕉全集書翰篇』(角川書店)や飯田正一編「蕉門俳人書簡集」(桜楓社)や『曾良旅日記』(天理善本叢書10)を繰っても嘉衛門という人物が出てこない。後に明石の吟を書簡で伝えているのだから芭蕉の須磨・明石の旅に興味を抱いていた人物とみられる。もし、そうであれば、やはり同年の滞在期間の長かった岐阜か名古屋、あるいは鳴海の人が想像される。これも憶測に過ぎないが、六月十九日「蓮池の」五十韻初裏に、

馬の乗たる舟のせばさよ

鷗歩

須磨明石見残すほどに暑くなり

拾景

の付合があり、あるいは芭蕉の須磨・明石の旅が、この座で話題になっていたのかも知れない。これ以上は憶測に憶測を重ねる結果となるので留めておく。しかしながら、この書簡から「蛸壺や」に関する最小の事実を見出すとすれば、2行目「帰り候後ハ」だと思われる。即ち更科の旅を終えて江戸に帰った後に、「蛸壺や」の句を知らせているのであろう。13行目の「十六日」の日付が、また問題となる所だ。芭蕉は八月下旬には既に江戸に帰着しているはずで、

それ以降なら翌年の「細道」の旅に出発するまでの間の「十六日」になろう。このように、筆跡・宛名・地名などの諸問題を含んだ書簡であるが、これに一縷の可能性を引き出すと、11の句が「猿蓑」企画前に成立しており、しかもそれは10の前書のない形であった事がいえる。

以上、須磨の条における「蛸壺や」の句解は、「明石夜泊」に依った解釈ではなく、須磨の条の主情に沿って解されなければならぬのではないかという見解を述べてきた。そしてもし、この推測が正しければ、おそらく芭蕉自身、須磨の条の主情を表わす最も相応しい句として、「蛸壺や」の句を考えていたように思う。

最後に、この句の私解を示し、結びとしたい。
蛸壺の中の蛸よ、おまえはまるで夏の月の如くあっけない運命にあるとは知らず眠りにについているが、一体この束の間にとどのような夢をみているのか。おそらく古戦場となった須磨浦の底で、藻屑となっていた人々の夢を見ていることだろう。

- ※1 上野洋三「『笈の小文』幻想稿」(S51年刊島居清編『俳諧攷』所収)
- ※2 網島三千代「『笈の小文』成立の諸問題」(『連歌俳諧研究』25号) 他、井本農一・尾形仿・赤羽学・阿部正美・大磯義雄各先生が芭蕉未定稿説をとる。
- ※3 宮本三郎「『笈の小文』への疑問」(S49年刊『蕉風俳諧論考』

笠間書院所収) 他、上野洋三・井上敏幸各先生が乙州編集説をとる。

- ※4 高橋庄次「『笈の小文』の謡曲構成について」(S48年8月『国語と国文学』)
- ※5 上野洋三「『笈の小文』(解説) (『芭蕉講座』S60年刊第五卷有精堂)
- ※6 『和歌大辞典』(S61年刊明治書院)
- ※7 大磯義雄「『笈の小文』(異本)の成立の研究」(ひたく書房S60年刊) および「沖森氏蔵写本『笈の小文』は異本系統」(『連歌俳諧研究』64号)によると、大磯本・雲英本・沖森本の写本に9の句はないという。
- ※8 井上敏幸「刊本『笈の小文』の諸問題(上)——須磨紀行をめぐって——」(S56年1月『文芸と思想』45)、同上題(続)(S57年3月『香椎瀉』27)
- ※9 古典文学大系『正法眼蔵 正法眼蔵隨聞記』水野弥穂子解説(岩波書店S40年刊)
- ※10 金子金次郎「連歌師と紀行」(V)「連歌師の紀行」(桜楓社H2年刊)
- ※11 『拾遺集』卷二十 題しらず「世の中を何にたとへん朝ぼらけ漕ぎゆく船のあとの白波」(沙彌満誓)
- ※12 『国文学』10号(S28年4月 関西大学)
- ※13 『日本古典文学大辞典』(岩波書店)